だけど！いいんだ・・・エロいのも全部、私なんだ！

その日、私は油断をしていました
追跡をしていた人物に捕らわれてしまった私は
ビームで拘束され、
あられもない姿にさせられました
そしてどこからか『声』が聞こえてきました
『ようこそフェイト執務官』

私は両手をビームで拘束された上で、両足も持ち上げられて恥かしい格好で晒されました。大きく両足を開かされ、大切な部分まで丸見えにさせられました

ドキ

ドキ

グッ

グッ

そんな・・・

ガバッ

『さあ　それでは楽しませていただきますよ』
聞き覚えのある声の合図と共に
どこからか粘液で薄汚れた触手があらわれて
私の肉体にまとわりつき始めました

ビクッ

うっ　ぐぅ・・・

ジュプッ

ニュル

アナニュ

ジュルッ

『くくく・・・いい格好ですよ・・・執務官殿』

その触手は私の女の部分に強引に入ってくると
激しく出入りをしました
「はっ・・・くぅ・・・」
私が悶えれば悶えるほど触手はまとわりついてきます
静かな部屋の中で私の体内に侵入してくる
触手のヌチャッ！ヌチャッ！という音だけが響きます

ビームに動きを封じられた私の肉体を
触手は我が物顔に動き回り
的確に私の急所を攻め続けます
胸にまとわりつき、穴の奥へ奥へと責め入り
私の肉体を翻弄します
ビクッ
うう…　ダメ…
これ以上は…
イレ
イレ
薄れ行く意識の中で私は最後の手段に出ました
「真ソニックフォーム　モードリリース」
ズボッ
ヌチュッ
5

私は戒めを解き、再び敵を追跡しはじめました
『さすがですね、しかし状況は全く変わらないのですよ』
「どういう意味？」

エリオ…
なぜ…？

その時、私の疑問に答えるように
目の前に囚われた人物があらわれました
「エリオ・・・！」

ビクッ

ビク

再び捕まった私はエリオと対面させられました
『くくく・・・感動の御対面はいかがですか？』
『おやおや　彼はあなたの姿を見て興奮してしまったようですよ？』

ハァッ
ハァッ

ドキッ
ドキッ

大丈夫だよ…
エリオ

ごめんなさい
フェイトさん

プルン

ビクッ
ビクッ

エリオのモノは私を見て硬く大きくなり
その先端からは半透明な液体が溢れていました
『さあ　彼のモノをあなたが慰めてあげてください』

両手を拘束されたままエリオの前にひざまづかされた私は
彼のモノを口に含み慰め始めました
「フェイトさん・・・」
「大丈夫だよ、エリオ・・・」

ちゅ、ズチュッ
ピクッ
ちゅく、
んっ
んっ
んっ

そう言うと、私は愛しい人の熱い肉棒を
丁寧にしゃぶり続けます
私の口の中で彼のモノがどんどん固く
大きくなっていくのがわかります

『それではお待ちかね
いよいよ　坊やが美しい執務官の肉体を
味わえますよ』
私はその恥かしい格好のまま持ち上げられて
エリオの上まで運ばれました
「ダメ・・・そんな・・・こんな格好で」
「フェイトさん・・・」

『くくく　感謝して欲しい位ですよ　お二人の仲を取り持つのですから』
『さあ、それでは本番と行きましょうか』
私は覚悟を決めました

持ち上げられていた私の肉体が徐々にエリオの上に降ろし始められました
「ああっ！」
「ううっ」
一つになり始めた私たちがうめき声をあげます
私の体は容赦なく降ろされていき、エリオのモノは
ズブズブと私の中へ入って行きました

『そぉら　見事に根元まで入りましたよ』
私たちは初めて自分たちの意思に反して
一つに繋がりました

『さあ　美しいお嬢さん　貴女が動いてあげなければダメですよ』
その声に導かれるように私が肉体を上下に動かし始めます
エリオの逞しいペニスが私の中に出入りし始めます
「エリオ　いい？　エリオ？」
「うう・・・フェイトさん・・・」
思わず私が口走ります
「もっとエリオ！いつものように」

気持ちいい？
いつ射精(だ)しても
いいんだよ♥

うかつに発した私の言葉に『声』が感心します
『ほほう・・・　すでに君たちがそういう仲だったとは・・・
それでは遠慮はいりませんね・・・』

ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ

戒めを解かれたエリオが私を犯します

「エリオ、いいよ　もっとしても・・・」
「フェイトさん　フェイトさん！」
「ふふふ　彼はすっかり肉欲の虜のようですね」

ビクッ
ビクッ
ビクッ
プルン
プルン
プルン
ズチュッ
ズチュッ

エリオ！　いいよ
もっと奥まで！
もっと激しく！

「言い忘れていましたがこの場所は特殊空間になっていましてね
性行為で絶頂に達するとあなた方のリンカーコアから魔力を
吸収する仕組みになっているんですよ」
そんな言葉もセックスの虜となった私たちには
もはや届きませんでした

精力尽きるまで私とセックスして意識を失ったエリオが別室に運ばれました

『流石ですね　貴女はまだ余裕を残していらっしゃるようです』

『それでは彼らにも活躍してもらいましょうか』

その『声』とともにどこからか出て来た男達が私を取り囲みました

その飢えた男たちが私の体を犯します

男たちの凶暴な肉棒は私の膣内で暴れ回り奥まで突き刺さります

私の肉壁が悲鳴をあげて侵入してきたチンポを締め上げると

男たちはケモノの様な声をあげて私の中に精液を注ぎこみました

飽きることなく何度でも・・・

ドプッ
ビュルルッ
ビクッ
ボボボ

それからは毎日がセックス漬けでした　男たちがかわるがわる私を犯します
私の肌が精液を浴びない日、私の穴が精液で満たされない日はありません

『ふむ、これだけの男をあてがっているというのに
あまり効率がよくありませんね・・・
やはり彼に手伝ってもらった方が良いですか・・・』
意識も朦朧としていた私が連れて行かれた先にはエリオが待っていました。
私はもっとも求めていた物を与えられました

エリオと私は一日中、繋がっていました
彼の肉棒は奥まで入ってきて私を喜ばせてくれます
私の肉壷も彼を絞めつけオスのエキスを搾り取ります
『ふふふ・・・やはり彼を改造して正解だったようですね』
肉体を改造されたエリオの精力は尽きる事がありませんでした

いいよ　エリオ…
好きなだけ…
何回でも出していいんだよ

ハァッ ハァッ ハァッ ハァッ

ハクッ

ムニュッ

私たちは全てを忘れてお互いを貪っていました
そうした毎日を続けている私たちは魔力も体力も尽きようとしていました
それでも私は彼以外には何もいりませんでした
『くっくっく　やはり彼との相性は最高だったようですね』
『他の男どもを全て合わせたより効率が良いとは素晴らしい！』
そんな『声』も私たちの耳にはもう届きませんでした

ヒュルルッ

ズボッ

ズチュッ

ズチュッ

ぷ〜

うう・・・
また出ます・・・

あはー おじしい…
うう…たまんねえな
こめんなさい フェイトさん
エリオ 今からもっと気持ちよくしてあげるからね